
僕と猫

ワールド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と猫

【Nコード】

N9416N

【作者名】

ワールド

【あらすじ】

ごくごく普通のサラリーマンがサービス残業をして、毎日嫌な会社を辞めようか考え、て帰宅中に起きた、車との事故、その後不思議な事・・・

僕と猫

今日も残業をして、会社を辞めようか、どうしようか考え、いつもと違う道で帰っていた。

信号が青になり横断歩道を渡ろうとした時

「プーッププププー」

信号を無視した車が走ってきた「キイツキイー」

急ブレーキをかけ、でも止まらない車が僕の方に突っ込んできた・

しばらくして、救急車の音喋り声や、叫び声が聞こえてきて、目を開けてみたら道路には、夥しいほどの血が流れていた。ふと、救急車に目をやると僕が運ばれていた。

「えっ！！どうゆうこと」「僕はここにいるのに？」「僕が運ばれている！？」そんな事を考え、パニックになっていると、救急車が走って行ってしまった。

近くにいた警察官の 人に

「今の救急車はこの病院に向かったのですか！」
でも無視、全く聞いてくれません。

野次馬の人にも聞いたのですが、聞いてくれません。少し冷静になり空を見ようと上を見ると、何もかもが巨大化していたのです。

ガラスに写った自分を見てみると、そこには猫が一匹いた。動い見るとガラスに写ってる猫も同じ動きをした。

そこで初めて、信じられないが現状を理解した。

ぼくは、信号無視した車に引かれてしまったのだ。

それで何故が分からないが猫になってしまった。

呆然として辺りを見ると、視界の右下に24と数字が浮かび上がっている。

他の場所を見ても数字の場所は変わらず、同じ所に浮かび上がっている。

「なんだこの数字は？」

すると、どからか声が聞こえてきた。

「その数字はお前の命」 「数字0になったら死ぬ」 「生きれば自分の体に触れば元の体に戻る。」

そう言つて声は聞こえなくなった。自分の体に触れば、僕はまた生き返れるんだ！

警察官達が、救急車が運んで行つた病院の話をしているのを聞いた。

「おっ！その病院知つてる、ここからそんなに遠くない！」

視界の右下の数字が23になっていた。

急いで病院に向かった。

猫の体になり、変な感じがしたが、ワクワクする気持ちの方が大きかった。

体は軽く、凄く早く走れる病院に行く事を忘れるほど楽しい気持ちで、いつぱいだった。

病院に向かつている時に、「助けてー！」声が聞こえた、聞こえる方に行つて見ると、猫が人間にイジメられていた。

イジメられている猫が、僕の事を見て「助けて！」と、必死に叫んでいた。

僕は、猫が喋っている言葉が分かるのに驚いた！

目を逸らしその場から、立ち去ろうとした時、「行かないで！」

お願い、助けて！」戸惑つたが、助ける事にした。

僕はイジメている人間に近づいて、「嫌がつてるからやめなよ！」つて言つた。言葉が通じる訳なかった。仕方なく爪を立てて、人間の肩によじ登り首を力いつぱい噛んだ。

「いつてえー！！！」

その隙に僕とイジメられていた猫は逃げ出した。

「ありがとう、助かったよ」僕はお礼を言われた。

なんだか不思議な気持ちだった。

猫の言葉が分かり、しかもお礼を言われてるからだ。これから行く所があるから僕は行くねっ！

その場所から立ち去ろうとした時、君の体から人間の臭いがする。人間は敵だ、なんで君からは人間の臭いがするんだ！助けてくれた事は感謝するけど、君は猫じゃない！

君は敵だ、助けられた猫は、齒を剥き出して、爪をだし、今すぐにも、飛び掛かって来る殺気だっていた。

それも分かる気がした、イジメられていた猫は骨が折れるほど殴られ、目も見えているのか？と言うほどに酷い姿だったのだ。

僕はその場から逃げだした「なんで助けたのに！」

少しイライラしていたが、人間の臭いがすると言われてなんか、猫になっっていない、ホツとする気持ちと、イジメられていた猫が可哀相で、心配で人間皆が悪い人ばかりじゃないのに！！そんな気持ちを抑えて、病院に向かって、夜の町を走った。

視界の右下の数字は20となっていた。

僕と猫

病院に向かって夜の町を、走っていると、めまいがしてきた。

頭がガンガンと痛く体が思うように動かせなくなつた徐々に意識が遠くなつていった・・・

気がつくと森の中にいた。夜の森は明かりもなかったが、月の明かりでも歩ける程だった。

当てもなく森を迷っていると先の方に人陰が見えた。「あつ！誰かいる！」暗い森に一人きりで心細い僕は人陰が見えた方に走つた。

そこには誰一人も居なく、あるのは、大きな穴があつた。

その穴の中を覗いてもどれだけ深いが分からない。

目を凝らして見ていると、バランスを崩して穴の中に落ちてしまった。

「うわああー！」

「うわああー！」

どれだけ落ちても、と言うか、落ちたはずなのに、僕は下に落ちてるんじゃない、上に落ちていった。

しばらくして光りが見えてきた。

光りが徐々に近くなり明るくなってきた。

穴から出られた瞬間、暗い所にいたせいか、目の前が真っ白になった。目が馴れてきて、僕が見た物は・・・「えっ！まさか・・・」

信じられない光景だった。

僕と猫

そこは、僕が車にひかれた場所だった。

辺りを見回しても、誰もいない、しかも耳が痛くなるほど静かだった。

近くに誰かいないか歩いて探して見ても、誰もいないどこに行っても静かだった。「なんだここは！」

その場所は誰もいない、僕一人しか存在しなかった。視界の右下の数字は18となっている。

「急いで病院に行かなくちゃいけない！」

誰もいないと思っていても病院に急いで走った。

「タタタツタタツ」

「ハアーハアー」

足音と乱れる呼吸の音だけが聞こえた。

しばらく走り、病院に到着した。

中に入ると、予想通り誰もいなかった。

「なんだよ！どうすればいいんだよ！」

僕は視界右下の数字は、どうなれば数字が減っているのか、今までの行動を振り返り考えた。

時間で減っていくのは、確実に違うと確信していた。そして思いついたのは、行動すると数字が減っていく病院に行こうと、動けば動くほど、数字が減っていくという考えだ。

その考えが当たっているか確かめようと動くのを止めた。

しばらくすると、眠くなり寝てしまった。

目が覚めると暗かったのが明るくなっていった。

外を見ると太陽がでていた、誰もいない町にも、朝と夜があることに安心した。視界右下の数字を見てみると18のまま、僕の考えは当たっていた。

感覚で行くと100歩動くと 数字が1つ減る感じだとおもった。

「そうだと、あちこち動けないな。」

「はぁぁー」

どうしていいのかわからず、ため息だけしかでこなかった。

僕と猫（前書き）

「僕一人しか存在しない町で、どうすればいいんだろう。」
時計を見ると10時になる所だった。

「ここにいても、しょうがない。」

病院を出ようと、ドアを開けた。

10時になり、時計が鳴った。

「ゴーンゴーンゴーン」

僕は時計の音にビックリした。

音が鳴り終わり、数秒だった時だった。

「ガシャシャーン」

上の階から、音が聞こえた。

「……んっ？えっ！！」

まさかと思ながら階段を駆け登ると、人が沢山いた。病院の先生達や患者さん達が通路を歩き来してた。

「ええー！！どうなっているんだ？」

何がなんだかわからず、病院の外に出て見ても、人が沢山いた。

何故このような状態になったのか不思議だけど、僕は少し安心した。

「なーんだ、知らないうちに元の世界に戻っていたんだあー」

僕は自分の都合がいいように解釈した。

歩いている人達を見てみると、1つ共通点があるのに気づいた。

それは、みんな首に同じマークが印されて、後から書いたものではなく、皮膚の一部のような、生まれる時にマークが付いているみただった。

すると、元の世界にいる時に助けた猫がいた。

「…あっ！あの時の…」

嫌な別れ方したので、あまり気が乗らなかったが、その猫と喋った事があり、会話が出来る事が知っていたから話をしに向かった。近くに行き目が合ったが、向こうは全くの無視。

僕は何もしてないのに、なんか凄く恨んでるような感じだったから無視してるんだと思い、「ねー君の事を助けた猫だけど……」

「…覚えてる!?!」

僕は少し強めな口調で言った。

すると、その猫は

「……………へっ?……………」 「誰ですか?助けて貰ってないよ」

「って言うか、最近助けて貰った事がないけど!」

確かにその猫はイジメられてできた怪我なくて、健康的な猫だった。あの酷い傷はそんなにすぐに治るものではなかったが、僕は猫の顔をしっかりと覚えているから間違える訳がなかった。

人間だった頃は猫を見てもみんな同じような顔に見えていたけれど、猫になってしまったてからはひとり、ひとり、全く違う顔に見えるようになっていたので自信があった。

違うのは、イジメられてできた傷がない事と、歩いてる人達がみんなある、あの首のマークが付いてあった。

僕と猫

病院に向かって夜の町を走っていると、めまいがしてきた。

頭がガンガンと痛く体が思うように動かせなくなり、徐々に意識が遠くなつていった・・・

気がつくと森の中にいた。夜の森は明かりもなかったが、月の明かりでも歩ける程だった。

当てもなく森を迷っていると先の方に人陰が見えた。「あつ！誰かいる！」暗い森に一人きりで心細い僕は人陰が見えた方に走った。

そこには誰一人も居なく、あるのは大きな穴が…

その穴の中を覗いても

どれだけ深いが分からない目を凝らして見ていると、バランスを崩して穴の中に落ちてしまった。

「うわああー！」

「うわああー！」どれだけ落ちてもと言うか、落ちたはずなのに僕は下に落ちてるんじゃないかと、上が上がっていった。

しばらくして光りが見えてきた。

光りが徐々に近くなり明るくなってきた。

穴から出た瞬間、暗い所にいたせいとか、目の前が真っ白に見えた。

目が馴れてきて、僕が見た物は…

「えっ！まさか！・・・」

信じられない光景だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9416n/>

僕と猫

2010年11月17日00時25分発行